



## 時事寸評⑱

### いじめ問題を 幼児期の課題として考える

宮里 六郎

福岡県筑前町の中学校2年の男子生徒がいじめを苦に自殺した問題をきっかけに、首相直属の教育再生会議も「いじめ問題への緊急提言」を発表するなど、大きな社会問題となっています。特に「提言」では、加害者を出席停止にする事が検討されるなど、いじめの子どもとそれを見過ごす教師への処分の強化となっています。しかし、子どもはケンカしたりぶつかり合ったりというトラブルの中で成長していくものであり、トラブルをなくしてしまうことはできません。幼児期の仲間意識や仲間関係の育ちという視点からいじめ問題を考えてみたいと思います。

#### 幼児期の仲間関係の特徴

幼児期特に4、5歳代の仲間関係の特徴は、第一に、友だちと友だちを比べて友だちの特徴をつかむようになること。第二に、自分と友だちを比べて自分に気づくこと。第三に、行動の背後にある友だちの気持ちも分かるようになることです。第四に、友だちの目が気になりおどけやふざけが増えることです。子どもは子どもの中で育ちあうのです。そうす

ると、あそびをとりしきる子など力関係が構造化され固定化されます。子どもには子どもなりの小さな人間関係ができあがるのです。そしてその前後で、力関係を探り合ったり確かめあったりします。まるで動物のようですが。それが時として、ちょっかいやいじわるや仲間はずしとして表面化するのです。

#### 事例「意地悪ケンカも育ちの肥料」

例えば、4歳児クラスのリーダー的なひとみちゃんとかのんちゃんの例。二人ずつ手をつないで帰ることになりましたが、なかよしグループ6人はかのんちゃんを除いて手をつなぎ始めました。Nちゃんとかのんちゃんだけが余って、Nちゃんはしぶしぶ顔でかのんちゃんと手をつなぎました。すると、ひとみ「あーNは約束やぶってから」S「ほんとだんね」と言うので保育者「ちょっとまって。約束ってなんの約束？」と尋ねると4人は黙っています。保育者「ねーNちゃん、約束って何の約束？」N「あんね、かのんちゃんと手をつないだらいかんと」保育者「どうして？誰がそんなこと言ったと？」N「ひとみちゃん」保育者「かのんちゃんみんなに何かした？」ひとみ「なんもしとらん」O「なんもしとらん」保育者「かのんちゃん好かん？」全員「好き」何でそんなことするのか聞いても答えてくれません。ひとみちゃんは

かのんちゃんとは一番仲がよくていつも二人であそんでいるのに、どうしてこんなことするのかわからなかったそうです。

## いじめと意地悪

仲間はずしにしたひとみちゃんは、自分の力を確かめたいという気持ちはあったでしょうが、かのんちゃんをいじめようという悪意はなかったのではないのでしょうか。幼児期では、悪意のある「いじめ」と力関係を探ったり確かめたりする悪意のない「意地悪」の区別が必要だと思えるのです。いじめ問題はいじめた方の気持ちよりいじめられた方の気持ちが最優先されるべき事は当然です（幼児期の場合意地悪されたこと自体を重く感じていないこともあります）。そのことを前提にしながらも、いじめにつながる意地悪とつながらない意地悪があるように思います。大阪市立大学の森田洋次さんは「人間はいじめの潜在的加害者、いじめ心を持った灰色の存在」とし、「なぜいじめめるのかよりなぜいじめないのが大事、つまりどう歯止めをかけるかが大事」だと指摘しています。意地悪なひとみちゃんを説教するのではなく、いじめにつながらないように歯止めをかけるのはどうしたらいいのでしょうか。担任の先生は、意地悪された方の気持ちもわかるように、この場面を同僚の先生と劇にして再現して見せた

そうです。相手の気持ちに目を向け始めたばかり、そんなに簡単に気持ちが分かるはずがありません。わかっていることを前提にしないでわかるように丁寧に関係をつくっていくことです。

子どもの仲間関係で生じるさまざまなトラブルを否定的にとらえ処罰するのではなく、子ども同士が通じ合い育ち合える関係につくりかえる地道な実践とそれを支える条件づくりこそ求められているのではないのでしょうか。

（本研究所研究員 保育学）

